（別表第1）

サービス評価結果表

サービス評価項目

（評価項目の構成）

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をＰＲ!!!

ーサービス向上への３ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人　愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和　3　年　10　月　25　日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	（回答数）	17名	（依頼数）	18名
地域アンケート回答数	9名			

※事業所記入

事業所番号	3890200029
事業所名	グループホームはとり
（ユニット名）	2Fユニット
記入者（管理者）	
氏　名	管理者　原　文香
自己評価作成日	令和　3　年　4　月　1　日

［事業所理念］	［前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果］	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
楽しく　健やかに　自分らしく暮らす。	＃1　個人記録を利用者のその日の行動や感情などが分かるように個人記録用紙を変更した。しかし、十分な記録になっていない。	市内中心部の住宅街に事業所は立地し、母体病院が道を挟んだ場所に隣接している。夜間の往診など、母体病院や協力医と24時間対応の緊急医療体制が構築されており、重度化した場合にも、利用者や家族、職員にとって、心強い環境となっている。また、施設長は、看護師と介護支援専門員の資格を持っており、自ら利用者の体調を確認しながら、利用者本位の生活支援に取り組むとともに、その意識が職員に十分理解され、ゆったりとした生活を提供することができている。さらに、現在のコロナ禍においても、感染対策に細やかで厳格に取り組んでいる。加えて、コロナ禍の収束後には、多くの関係機関と連絡を取り合うことが再開され、地域での存在感が、より増していくことが期待される事業所である。

評　価　結　果　表

項目No.	評価項目	小項目	内　容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	利用者さんとの会話などで好みを把握して、より良く生活できるように努めている。	◎		◎	事業所ではフェイスシートを活用して、利用者や家族から、思いや意向を丁寧に聞き、把握している。また、要介護度の高いユニットにおいて、思いなどを確認することは大変難しく、職員は利用者の様子を観察しながら、判断して汲み取るよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	利用者さんの日常の様子を観察し、会話をしてその人の思いをくみ取り、カンファレンスでは「本人はどうか」という視点で検討している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）とともに、「本人の思い」について話し合っている。	×	感染症要望の面で家族面会も少なく、電話のみでの対応になっている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	カンファレンス時やミーテイングで共有化を行っている				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	会話時の本人の表情・しぐさなどを基にしており、カンファレンスで共有し、職員の思い込みや決めつけが怒らないように努力している。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）から聞いている。	○	入居時に本人家族より聞き取りを行い、また居宅介護支援事業所からも必要な情報をいただいている。			○	入居時に、職員は利用者や家族から生活歴などを聞き、把握している。また、母体病院やデイサービスの利用から、事業所への入居につながることもあり、法人とのつきあいも長く、これまでの暮らしぶりを細かく把握できている利用者もいる。さらに、把握した内容は、センター方式を含む独自のアセスメント表を活用して、整理されている。加えて、母体病院等からの情報や、生活歴の情報が少ない利用者には、エコマップを活用したり、知人や関係者から情報を聞いたりするなど、より詳しく利用者のことが把握できるよう、職員間で検討することを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力（わかること・できること・できそうなこと等）等の現状の把握に努めている。	◎	定期の訪問診療や一日2階のバイタル測定時に本人の心身状態を把握し、活動状況を把握している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	心身の状況の変化はその都度共有し、申し送り時に伝達している。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。（身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等）	○	出勤した職員は利用者とのかかわりを十分に持つように努めており、その時に状態を把握している。その情報を朝夕の申し送り時に伝達し記録している。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	生活を共にして、利用者の一日の生活状況を把握し、細かな変化にも気付けるように努力し、気づきは介護記録に記入している。				
3	チームで行うアセスメント（※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む）	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	把握した情報を基にカンファレンスを行い、本人の視点で検討している。			◎	事前に把握したアセスメント情報をもとに、利用者や家族の意見を参考にしながら、カンファレンスを活用して話し合いをしている。また、定期的に、一人ひとりに認知症のスケールを実施し、利用者の現状確認とニーズを洗い出している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	朝・夕の申し送り時などに細かなカンファレンスを行い、ミーテイングで全職員と共有し検討を行っている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランの課題として支援につなげている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ケアプランは本人の想いを聞き、本人の意向や暮らし方が反映された内容にしている。				介護計画の更新前に、事前に利用者や家族の意見を聞くほか、主治医や関係者の意見を取り入れて、カンファレンスで意見やアイデアを募りながら話し合い、計画作成担当者を中心に計画を作成している。現在のコロナ禍において、事業所では面会制限も設けられていることもあり、家族のカンファレンスへの参加は難しく、事前に電話等で意見や意向を聞いている。また、事業所では、利用者や家族の意見や意向を、可能な範囲で反映させた計画づくりに努めている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	△	本人や職員、医療関係者と話し合うことは多いがご家族と話し合いの場を持つことが少ない。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の利用者に対しても、今までのその方の暮らし方や思考を基に、本人の意向が反映できるように努めている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	新型コロナウイルス感染予防もあり、家族等や地域の人たちと本人が接する機会が少なく、ほぼ緊急時の協力体制になっている。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	個別の検温版に、職員が毎日計画を把握することができるように貼付し、職員間で共有している。			◎	個別の温度板（ボードタイプの検温表）の左下欄に、介護計画のサービス内容等を転記し、全ての職員は、計画の内容を簡単に確認できるようになっている。また、計画どおりのサービスの実施の有無を、○印で分かりやすく記載している。サービスの実施結果は記載できているものの、実施できなかった場合の理由を記載したり、実施時に日常と違う利用者の様子や発した言葉を記録に残したりするなど、記録の負担軽減とともに職員間で検討することを期待したい。さらに、職員からアイデアや意見は出されているが、個別の記録は少なく感じられる。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	温度板の計画欄に、計画が実行できたかできていないかの欄を作り、印をつけて状況確認をして日々の支援に繋げている。			◎	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子（言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等）や支援した具体的内容を個別に記録している。	△	介護記録に記載するようにしているが、利用者の詳細な様子の記録が少ない。			△	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	カンファレンスやミーティングでは気づきの話はするが、日々の記録に気づきの記録が少ない。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	介護計画期間に応じて見直しを行っている。			◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。毎月実施するミーティングの中で、利用者の状態を詳細に確認して評価するとともに、職員間で共有することができている。また、事業所では、入退院のほか、状態に大きな変化が見られた場合には、臨時的に計画を見直す体制を構築している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	各個人の評価表で確認を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	本人の状態変化に応じて見直しを行っている。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	朝夕の申し送り時や月1回のミーティング時に緊急会議を行い、本人の状態の変化に対応している。			◎	毎月ミーティングを開催するほか、3か月に1回カンファレンスを実施し、職員間で意思統一を図ることができている。緊急案件がある場合には、必要に応じて話し合うことができている。また、会議に参加できない職員には、事前に意見を聞くほか、会議録を確認してもらい、確認後に押印をしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	ミーティング時には、参加職員全員が発言できるように、活発な意見交換を行っている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	できるだけ多くの職員が参加できる日を設定している。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	参加できていない職員も記録や日誌を確認して、話し合いの内容を確認している。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	日誌・個人記録・温度板を利用して申し送りを行い、情報が共有できるように勤めている。			◎	事業所では、毎朝申し送りを実施するとともに、必要に応じて話し合うことができている。また、ケアの内容以外のことも、業務日誌の申し送り欄を使用して伝達することができる。さらに、出勤時等に、職員は業務日誌を確認し、押印をして確実な申し送りにつなげている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。（利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等）	○	朝夕の申し送り時、出勤時に日誌等を確認し、情報を共有している。	◎			

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2)日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にした支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	散歩や会話等個別に希望に添えるように努めている。				事業所では、その日にしたいことなど、利用者一人ひとりの希望や意向を尊重した支援に努めている。見たいテレビ番組や着たい衣類など、日常生活の様々な場面で、職員は利用者に声かけや確認をしながら、自己決定ができるよう支援している。また、施設長は、「利用者への声かけや雰囲気づくりはできているが、現状に満足せずに支援していきたい」と考えている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。（選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等）	○	朝の着替えや入浴後の着替え等、利用者のその日の好みに合わせたものを選んでもらっている。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	職員と利用者が会話する機会を多くして、生活の場で活かしている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にした支援を行っている。（起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等）	○	介護度の違いや、本人の想いを大切にして、利用者の生活のペースに合わせている。				
		e	利用者の活き活きした言動や表情（喜び・楽しみ・うるおい等）を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	「和顔愛語」に努め思いを共有している。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や動作を確認して本人の意向に沿えるようにしている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にした言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	認知症があっても、その人らしい生き方ができるよう尊厳を守るように努めている。	◎	◎	◎	申し送り時を活用して、施設長は、人権や尊厳などを話すよう心がけており、職員は理解している。耳の遠い利用者もおり、時には大きな声を出してしまうこともあるものの、職員はさりげない声かけを心がけている。また、職員は、居室をプライベート空間と認識し、入室時には意識した声かけをすることができているものの、まれに利用者に確認せずに、声かけと同時に入室してしまう職員もいる。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	耳の遠い方もおられるため、大きな声になることもあるが、できるだけ、さりげない言葉がけをするように努めている。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮ながら介助を行っている。	○	安心して介護が受けられるように、プライバシーに配慮して介護を行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室への出入りは必ず本人の了解を取り、居室での排せつなども、プライバシーに気を付けて介護を行っている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	個人情報の取り扱いに注意して書類の保管を行っている。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	日常の作業を通して、利用者とともに生活リハビリを行い、終了時には感謝の気持ちを伝えて助け合って生活している。				利用者が他の利用者を心配し、利用者同士で声かけや見守りをする場面も見られ、職員はその様子をさりげなく見守っている。また、逆にトラブルが起こりそうな場合には、前もって職員が間に入り、さりげない早期の対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者職員とも仲が良く、声を掛け合いながら生活している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。（仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等）。	○	利用者同士の関係性を職員は理解しており、トラブルが起きないようにさりげなく場面変更などを行い、利用者同士の関係性は職員間で共有している。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	利用者同士でトラブルが生じた時には、職員は静かに見守りつつ傾聴したり、レクリエーションや散歩に行ったり気分転換を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	現在支援をしていただいているご家族は把握しているが、人数的には多くはない。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入居時の利用者・ご家族からの聞き取りと、日頃の会話により把握している。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	新型コロナウイルス感染の予防のため、外部の人と会うことはあまりないが、なじみの場所に行くようにしている。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	△	現在は、新型コロナウイルス感染症予防のため面会は制限している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。（職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない） （※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む）	△	散歩は、行うようにしているが、時間帯や行き先は、希望通りには行うことができていない。	△	○	△	コロナ禍以前は、ドライブをしてコーヒーを飲みに行ったり、近所のコンビニエンスストアに出かけて買い物をしたりするなど、日常的に外出することができていたが、現在のコロナ禍において、外出できる機会は激減している。また、重度の利用者も車いすで、同様に外出できていたが、外気浴程度に留まっている。現在は、感染状況を確認しながら、天気の良い日には、事業所周辺の散歩や外気浴をするなど、少しでも利用者が気分転換できるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	新型コロナウイルス感染予防のため、地域の方やボランティアとの接触はできるだけ控えている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	△	重度の方も、職員が車いすで外出しているが、近隣のみになっている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	新型コロナ感染症予防のため、普段いけないようなところへの外出は、行っていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	日常生活の中で、利用者の思いや状態を理解するように努めて介護を行っている。				職員はさりげなく見守りながら、利用者自身でできることはしてもらう支援に取り組んでいる。また、現在2階ユニットには重度の利用者が多く、施設長は、「できることが少なくなり、自身でしてもらう場面づくりが難しい」などと感じている。さらに、日常的にリハビリ体操を実施するほか、個別にリハビリメニューに取り組んでいる利用者もいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴（筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等）を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	毎日、リハビリ体操、ラジオ体操を行い、利用者に必要な歩行訓、立ち上がり訓練などを行っている。食事や排泄は、その時の利用者に合わせ用具を用意して日常生活の中で自然に、できることが増えるように援助している。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。（場面づくり、環境づくり等）	○	洗濯ものたたみ、料理の下ごしらえ、リンゴの皮むきなどその利用者ができることを見守りながら行っている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者本人の生活歴や話の中から特異な物や希望する者を探して把握している。				歌や踊り、習字など、利用者の好きなことに取り組んでもらえるよう支援している。また、併設のデイサービスから、レクリエーションの担当職員に来てもらい、事業所では、行事や日中のレクリエーションの充実を図り、利用者が楽しく過ごせるよう取り組んでいる。さらに、訪問調査日にも、レクリエーションをしながら、利用者の生き生きとした表情を見ることができた。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	習字の先生には献立書、唄の得意な方には歌ってもらう、また踊りの師匠だった方には行事の時に踊っていただくなど、利用者個人の特技を把握して役割や出番を作っている。	○	◎	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	以前は、地区の祭り、など地域の行事に参加していたが、現在は感染対策のためほぼ中止になりできていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	利用者本人の希望に沿って、洋服を選択していただき、その人らしい身だしなみになるよう支援している。				気配りや目配りの中で、職員は整容の乱れを早期に発見し、さりげなく対応することができている。重度の利用者にも、着替え時の前に好みの服を確認するとともに、着替え後には笑顔などの表情で判断しながら、本人らしさが保てる支援に努めている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	◎	本人の個性に合わせて、髪型や毛染めを本人、美容師さんと話しながら決めている。服装に関しても、一緒に買い物に行き好きな洋服を購入することもある。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定がしにくい利用者には、職員がさりげなくアドバイスを行って支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	感染予防のため、現在外出支援はできていないが、行事の時にはその人に合わせた季節感のある服装をしていただくよう支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしてさりげなくカバーしている。（髪、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	○	本人のプライドを大切にしながら近くの職員がさりげなくカバーしている。	◎	◎	◎	
		f	理容･美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	理容・美容は本人の行きつけのお店に行けるように、援助していたが、新型コロナウイルス感染症が収まるまでは、訪問美容を利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	着替えの前に本人の好みを確認して援助している。			◎	
17	食事を楽しむことの できる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	職員は、利用者が食事を日々楽しくおいしく食べられ、健康に過ごせることが大切と理解している。				利用者の希望や旬の食材を取り入れながら献立づくりをするほか、調理の下ごしらえや片づけなど、利用者にできることを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。コロナ禍以前は利用者と一緒にスーパーなどに出かけ、買い物をすることもあったが、現在は事業所で一括して、業者に注文をしている。アレルギーのある利用者には、食材を使用しないよう気を配ったり、代替品を用意したりするなどの対応をしている。利用者の状態に合わせて、刻みやミキサー食などの食事形態の対応もしている。食器類は、利用者の希望があれば、自宅から使い慣れた物を持ってきてもらい、使用している利用者もいる。食事の際には、職員も見守りや声かけをしながら、利用者と同じ物を一緒に食べることができている。また、ユニット毎に、アイランドキッチンを使用して調理していることもあり、重度の利用者も音や匂いを感じることができている。さらに、母体病院の管理栄養士に献立のバランスを確認してもらったり、実際に事業所に来訪し、助言を受けたり、利用者の栄養状態も病院の検査結果で確認することができている。加えて、訪問調査日には、個人記録等から体重が増えている利用者の食事量について、職員等で検討している書面を確認することができた。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともに行っている。	○	買い物は、施設で購入している、以前は近くのスーパーやコンビニに階に行くこともあったが現在は行っていない。献立作り、調理や片付けはできる利用者とともに行っている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	利用者とともに料理の下ごしらえ、下膳やテーブル拭き等を行い、感謝の言葉を言うことで、利用者の自信、達成感につなげている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	職員は、利用さの好みやアレルギーについて、個人記録や毎日の申し送りで把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	◎	季節感がある旬の食材を使用しており。その時に各個人のし好やアレルギーを考慮している。			◎	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等）	○	利用者の身体機能に合わせ、普通食、刻み食、ミキサー食など様々な食事形態を用意している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	利用者個人の使い慣れたものを使用している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	職員も利用者と一緒に同じテーブルで、利用者と会話を、声掛け介助もしながら同じものを食べている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	フロアーでくつろがれる利用者が、調理の音や臭いを感じることができ、食欲をそそる。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	個別に必要な栄養が摂取できるように配慮している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	食事の形態や飲み物の工夫を行い、希望に応じてまた、利用者の体調に応じた水分補給を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	定期的に職員間で話し合い、また病院の管理栄養士にも相談して、アドバイスを受けている。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食器は食器洗浄機にかけ、調理器具は必要に応じてスキッシュなど消毒を利用している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	歯科医師・sh時下衛生士の指導を受けて職員は口腔ケアの重要性を把握している。				定期的に、歯科医の訪問があり、全ての利用者の口腔内の状況を確認してもらい、報告書を確認して把握することができている。また、定期的に歯科衛生士にも、歯磨きの指導をしてもらうなど、職員は口腔ケアの重要性を理解している。さらに、毎食後のほか、朝夕にも利用者は歯磨きなどの口腔ケアを行い、職員は見守りをするほか、必要に応じて介助を行っている。加えて、異常が見られた場合には、歯科医の往診などにつなげている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況（虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等）について把握している。	◎	歯科医師の訪問時の報告書により把握している。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科衛生士から個人の歯の状態に合わせたケアの方法の指導を受け支援に生かしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	利用者の認知症の状態に応じて、見守り一部介助・全介助を行い支援している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。（歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等）	◎	毎日の食後と朝・夕に必要な介助を行っている。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	口腔内に異常があれば、家族の了解を受け歯科医に往診を依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	トイレで排泄ができるように心がけ、紙パンツやおむつが必要な時には。プライバシーに配慮して介護を行っている。				高齢化や重度化等に伴い、ほとんどの利用者は日中も紙パンツを使用して過ごしているものの、事業所では、安易におむつを使用することなく、可能な範囲で昼夜問わず声かけや誘導をして、利用者がトイレで排泄ができるよう支援している。職員は排泄チェックシートに記録し、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握している。また、要介護5の利用者にも、トイレ誘導を行い、トイレで排泄することができている事例もある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	職員は、便秘が体や心に及ぼす影響について理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。（間隔、量、排尿・排便の兆候等）	◎	排泄記録を基に利用者個人の排泄パターンを把握し申し送りで伝えている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々の状態にあった支援を行っている。	◎	トイレでの排泄を基本としており、一人一人の状態にあった支援をしている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	看護職員・介護職員で話し合い、改善できる点がないか検討している。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個別のパターンに合わせた声掛け誘導を行い、排泄の失敗を少なくするよう努めている。				
		g	おむつ（紙パンツ・パッドを含む）を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	スタッフ間で検討し本人家族とも相談しながら支援している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ（紙パンツ・パッドを含む）を適時使い分けている。	○	その時の生活場面や本人の状態に合わせている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。（薬に頼らない取り組み）	○	体操や散歩、水分補給や乳酸菌飲料を取り入れて自然排便を促す取り組みを行っている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。（時間帯、長さ、回数、温度等）。	△	希望が確認可能な利用者には希望に合わせているが、リフト浴など重介護の必要な利用者は、機械の空いている時間帯になるため曜日・時間ともほぼ決まっている。	◎		○	利用者は、週3回入浴をすることができる。重度の利用者にも、事前に曜日や時間帯を調整をしながら、併設のデイサービスにあるリフト浴を活用して、湯船に浸かれるよう支援することができている。入浴時にも、洗身など、利用者自身でできることはしてもらい、見守りや待つ介護などの支援にも取り組んでおり、一人ひとりの入浴時間を十分に確保した支援をしている。また、湯の温度や入浴時間など、利用者の希望に応じて、体調面にも考慮しながら、可能な範囲で柔軟に対応することができている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	見守りにて個別に入浴している、かなり長時間入浴される方もおりくつろぎの時間を過ごしている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	利用者本人の状態に応じて、一般浴・リフト浴ができるようになっている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	現在2階は入浴拒否の方はおられないが、拒否の場合には入浴時間、日にちの変更を行って入浴できるよう配慮をしていた。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	バイタル測定や利用者の状態を考慮して必要時に相談している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	毎日の申し送りや介護記録で把握している。				入居前から、眠剤などを服用している利用者には、とりあえず継続して服用してもらっている。夜間に、精神症状が顕著な場合には、体調面を考えて医師に相談しながら、利用者の生活リズムで過ごせるよう支援している。また、事業所では、日中の活動量を増やすなど、夜間に利用者が良眠できるよう努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	申し送りや介護記録を確認して、利用者が領民できるように支援している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	主治医や看護師と相談しながら、日中の活動量を増やしたり総合的に援助を行っている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	食後の休息を、個別に支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人や家族からの要望があれば取り次いでいる。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人の希望時に、こちらからは伝えられなくても電話を替わったり必要な援助を行っている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	希望時に電話が掛けられるよう、予めご家族と話し合いを行っている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	利用者の希望があれば、返信の援助を行っている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	本人や家族の希望に添えるよう支援を行っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	利用者がお金を使うことが楽しみであることを理解しており、新型コロナウイルスが流行する前には、散歩の途中でコンビニエンスストアで買い物をしたりコーヒーを飲んだりしていた。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	現在、新型コロナウイルス感染予防のため、人ごみへ控えている。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	近隣のコンビニエンスストアやスーパーの協力が得られている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	金銭管理は事務所で行っているが、本人が使うことができるように、自分で払える方は小銭入れを所持して買い物や縁日に出かける。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	家族に同意を得て、本人が小遣いをもって使うことの同意を得ている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。（預り金規程、出納帳の確認等）。	○	令和3年4月より、預かり金を預かり管理、月一回請求書とともに預かり金の収支を家族に送付している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	ご家族と疎遠な方や成年後見、補後見人の方には、家族や後見人と話し合い、日常生活に必要な受診や買い物をスタッフが対応している。	◎		○	認知症の進行など、利用者の意思疎通の低下などに伴い、必要に応じて、事業所では後見人等に確認するほか、成年後見制度につなげる支援をすることもある。また、現在のコロナ禍において、事業所では外出や面会の制限が設けられているものの、利用者や家族の希望や要望に応じて、可能な範囲で柔軟に対応をしている。

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	日中は玄関に施錠せず、普通の民家の玄関にしており、出入りは自由だが、現在新型コロナの影響で検温や問診なしでは入れない。	◎	◎	○	事業所のある建物の1階にはデイサービスがあり、多くの地域の利用者が来訪している。事業所の玄関は道路に面しており、横には駐輪スペースが設置されている。また、建物の横には道路を挟んで母体病院が隣接しており、地域住民の通院も多く、馴染みの場所になっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。）	◎	普通の家庭と同じしつらえの玄関になっている。	◎	◎	◎	共用空間には、ソファやテーブル、テレビなどが置かれ、訪問調査日には、利用者同士が話しをしながら、ゆったりと過ごしている様子を見ることができた。アイランドキッチンがあり、職員はフロアで過ごす利用者の様子を見渡すことができる。また、掃除も行き届き、不快な音や臭いもなく、快適な空間となっている。さらに、玄関先やロビーには、生花や季節感のある飾りを置いている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	玄関や居間にも不快なものは置かず、掃除も毎日行っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	玄関や居間の壁面に季節感のある飾り物を置き、季節な花を飾ったりイメの季節が理解しやすい演出を心掛けている。			○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合うもの同士で思い思いに過ごす時間を妨げないようにし、一人になれる畳の空間を作っている。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないよう工夫している。	○	共有空間からは見えにくい場所にある。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	利用者に合わせて、鏡台や机、写真や使い練れた椅子などを、居室に配置して居心地よく過ごせるように援助している。	◎		○	居室には、ベッドやタンスなどが設置されている。利用者は使い慣れた家具などを持ち込むことができるほか、写真を飾るなど、利用者一人ひとりに合わせた居室づくりを支援している。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	利用者個人の状態を把握しており、日常生活の各場面で安全で自立した生活が送れるように、家具の配置や福祉用具の工夫をしている。			◎	職員は、利用者一人ひとりの状態に合わせて、生活を送りやすいよう居室にある家具の配置を変更したり、車いすや歩行器などの福祉用具を選定したりするなどの支援をしている。また、利用者の自立支援を意識して、事業所ではできることはしてもらうように支援している。さらに、利用者が分かりやすいよう、トイレの表示を大きくしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	その時の利用者の認知の状態に応じて、不安や混乱を招くようなものを考えて配置する。また消毒薬などは誤嚥の心配のあるものは必要時のみ用意して事故を防ぐようにしている。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	歌詞カード、新聞、等いつでも利用できるようにさりげなく用意している。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	1階の玄関は普通の家の鍵、各フロアの玄関には全く鍵はなく心理的に不安にならないように援助を行っている。	◎	◎	◎	日中、玄関や各ユニットの入り口は施錠をしておらず、夜間のみ防犯目的で施錠をしている。また、職員は勉強会等で学び、職員も鍵をかけることの弊害を理解している。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	利用者の家族とは、入所時に話し合っており、施錠を望むご家族はおられない。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	散歩などをして、外出の機会を作り気分転換を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	利用者の個人ファイルがあり、確認できるようになっている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	朝・夕の申し送りや看護職からの連絡・バイタル表や温度板がある。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	看護職が常勤でおり日中はいつでも主治医と連絡が取れる。また夜間急な利用者の不具合にも、病院の看護師が対応を行ってくれる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	協力医療機関の往診があり、家族の希望する医療機関受診もできるように援助している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	希望のかかりつけ医の受診支援を行っている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	医療機関受診や通院等ご家族と情報を共有し、必要に応じて話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時に必要な情報を提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	病院入院後も、定期的に訪問又はご家族より状態を聞き、早期退院に向けて協働している。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃より病院関係者との関係づくりを行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	常勤の看護師がおり、必要時には迅速に歌謡力医療機関に相談している。				
		b	看護職もしく訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	母体であり病院に24時間相談することができる				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	日頃より状態の変化があれば、看護師と相談できるようにしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	主に看護職が管理しているが必要時は資料で確認できる。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	薬の変更時は、看護職が確認し、日誌などで伝達して誤訳を防いでいる。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	服薬時に変化があれば早期に看護師に相談し、指導管理の薬剤師に相談したり。、医師に相談することができる。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	心身に変化のある時には、看護師・薬剤師・医師に相談することができる。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入院時や、本人の状態が変化した時には、本人家族に確認して医師に伝達相談して方針を共有している。				事業所には、「重度化した場合における対応及び看取りに関する指針」があり、入居時に利用者や家族に説明して、同意を得ている。事業所の横には、医療連携が取れている母体病院のほか、協力医があり、夜間の往診体制も取れていることや、看護師でもある施設長が勤務していることもあり、利用者や家族、職員は安心感がある。また、重度化した場合には、利用者や家族、関係者を交えて話し合い、方針を共有しているものの、病院や施設への転院を希望する利用者が多く、事業所が開設してから看取り介護の支援をした利用者はほとんどいない。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	重度化・終末期の在り方について、協力医療機関関係者で話し合い方針を共有している。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	現在、看取りの方はいないが、その時の職員でどこまでの見取りができるかの見極めを行い、本人に苦痛を与えない看取りができるかできないかを常に判断している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入所の段階で見取りについては説明を行い理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	医療関係者との連携を図りつつ、職員全体で、利用者が日々よく暮らせるように支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	○	御家族への心理的支援を行いつつ、利用者の日々の支援を行っている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	現在、ノロウイルス感染症対策のため、外部研修への参加は控えているが、母体の医療機関の研修に参加し、また、感染症に対する資料が配布される。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染症予防マニュアルがあり、マニュアルに沿った対応を行っている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所や行政から出る予防や対策について、最新情報を入手し日誌に閉じている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	病院との連携を図り対応を行っている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	玄関や各階の出入り口、事務室などに自動手指消毒器を置き、手洗いを徹底して行っている。利用者や来訪者にも清潔が保てる用にしている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	2ヶ月に一回はとり新聞を送付し、必要時にはご家族日本の近況報告を行っている。				現在のコロナ禍において、事業所では面会方法に制限をかけているため、家族は事業所の行事や活動に参加することはできていない。コロナ禍以前は、お花見会などに参加を呼びかけて食事会を行ったり、家族会を開催したりすることができていた。また、事業所では、2か月に1回写真を多く取り入れた「はとり新聞」を発行して、利用者の事業所内の様子を伝えている。また、事業所には、家族連絡専用のノートがあり、毎月1回は家族と連絡を取ることを心がけている。利用者家族等アンケート結果から、事業所内の出来事や職員の入退職などの情報が十分に伝わっていないことが窺えるため、「はとり新聞」等を活用して掲載したり、コロナ禍の収束後には、来訪時や家族会でお知らせしたりするなど、理解が得られる取組みを期待したい。さらに、家族の面会時や電話連絡時には、職員から積極的に声かけができているため、家族は安心している。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。（来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等）	○	来所しやすい雰囲気にしているが、現在は感染対策のため、ご家族を居室に上がっていただくことはしていない。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。（食事づくり、散歩、外出、行事等）	○	ホームの行事には必ず御家族も参加していただくように招待していたが。現在は新型コロナウイルス感染予防のため、招待していない。	◎		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。（「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等）	○	2ヶ月に一回はとり新聞を送付し、必要時にはご家族日本の近況報告を行っている。	○		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	家族への連絡時にさりげなく、ご家族の知りたい情報や不安に感じていることの具体的な内容を把握している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。（認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等）	○	入所時や面会可能な時期には、本人と家族の関係を指示し、できるだけ関係が保てるように努めている。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。（行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等）	○	利用者についての必要な連絡や報告は、行事報告なども含め、定期的に行っている。	×		△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。（家族会、行事、旅行等への働きかけ）	×	現在は、新型コロナウイルス感染症予防のため、交流イベントは行っていない。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にした対応策を話し合っている。	○	入所時の面談時に、入所時のリスクについて説明を行っている。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	家族来訪時や、状況報告時に、ご家族の意見や希望をさりげなく聞き相談できるようにしている。			◎	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	具体的に、説明を行い理解していただけるよう努めている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退去時には、退去理由などの説明を行い、転居先にスムーズに転居することができるよう支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。（食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等）	○	文章を提示して説明し同意を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	地域の自治会に理解を得られるように説明している。		◎		法人として、自治会に加入している。現在のコロナ禍において、地域の行事等は激減しているものの、職員は公民館活動にも参加したり、日常的に地域住民に挨拶をしたりすることはできている。コロナ禍以前は、琴などのボランティアを受け入れることができていたが、現在は面会制限もあり、中止している。また、地域住民も参加できる「認知症の家族の集い」などを計画していたが、実現することはできていない。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	地域の方たちとは、日常的に挨拶をして、また地域の自治会への参加、民生委員との連携を行っている。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	近隣住民の方が、声をかけてくれたり、「ここのグループホームがあってよかった」と言ってくださる方が少しづつ増えている。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	現在は、新型コロナ感染予防のためできていないが、職員が外に出ている時などに気軽に立ち話等している。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	現在は感染対策のため立ち寄っていただくことはできないが、近隣の人と気軽に声を掛け合ったり日所的なおつきあいをしている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	△	現在は、感染予防のため、近隣住民のボランティアの支援を受けることができていないが、日常帯に見守りを行ってくれている。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	地域で参加できる、資源が少ないが、地区の広報などで情報は把握するようにしている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	地域の人たちや、近隣のコンビニ、スーパー、交番、神社、お寺などと日頃から理解を深め、良い関係が保てるよう努力している。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	現在、新型コロナウイルス感染対策のため、運営推進会議は書面開催になっている。	×		○	現在のコロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。会議では、利用者の状況や事業所の行事などの活動を報告するとともに、全ての家族に議事録を送付することができている。また、書面開催においても、事前に会議資料にハガキを添えて送付し、参加メンバーから会議の異議の有無や意見などをもらうことができている。さらに、「事業所内の空間を活用して、催しをしてはどうか」などの意見が出され、検討している。コロナ禍の収束後の集合形式の会議開催においても、2か月に1回の会議の連続性や継続性の中で、不参加のメンバーにも、対応の流れが分かるような報告書を送付したり、会議資料の中に、前回の会議情報を記載したりするなど、より充実した会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	外部評価結果を、サービス担当者会議で報告している。			◎	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	△	会議で出された意見や提案を、議事録に記入しサービスの向上につなげている。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	現在は書面開催だが、運営推進会議は、できるだけ多くの人が出席できるよう配慮している。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	運営推進会議議事録を、各階エレベーター前に設置している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	各階に理念を掲げ、日々確認して仕事に取り組んでいる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	利用者、家族、職員、地域の方にも理念をわかりやすく伝えている。	○	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	代表者は、管理者や職員の力量を把握して、計画的に研修に参加できるように援助している。				月１回のミーティング時を活用して、計画的に勉強会や研修を実施するなど、職員のスキルアップに努めている。また、施設長は、日常業務や職員会議を活用して、職員から上手に意見を聞き出すことができている。さらに、法人・事業所として、定期的にストレスチェックを実施するほか、労働安全衛生管理委員会などの場を活用して働きやすい職場環境の改善をテーマに話し合うなど、熱心に取り組んでいることもあり、離職者も少なく、チームワークの向上にもつながっている。
		b	管理者は、OJT（職場での実務を通して行う教育・訓練・学習）を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	OJTを計画的に行い、職員のスキルアップができるよう取り組んでいる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	代表者は、管理者はじめ個々の職員の努力や実績、勤務状況を把握しており、給与水準、労働時間等各自が働きやすいように、環境・条件の整備を行っている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。（事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加）	◎	代表者は、管理者はじめ職員が、愛媛県地域密着型サービス協会・今治市グループホーム交流会、アゼリア会、認知症の人と家族の会へ参加をする機会を作り、その活動を通じて職員の意識を向上させていく取り組みを行っている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	◎	毎月、法人内で医療と介護の連携会を開催し、労働安全衛生管理委員会を開催して職場の環境作りに取り組んでいる。	○	◎	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	毎月、虐待防止の勉強医会を行い職員皆が自覚できるように努めている。				定期的に、虐待防止委員会を開催して話し合うとともに、勉強会を実施し、職員は理解している。また、月１回のミーティング時を活用して、「不適切なケアはないか」などの話し合いをしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	毎月の職員ミーティングで、ケアについて話し合う機会を作っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	職員ミーティングで、虐待や不適切なケアについて話し合いを行い、虐待や不適切なケアが見過ごされないよう注意を払っている。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	ストレスチェックを行い、高ストレスの職員には、産業医を受診しカウンセリングを受けることを進めている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	職員は研修や、ミーテイング後の勉強会などで、「指定基準となる具体的な行為」屋「緊急やむを得ない場合」について正しく理解している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	毎月話し合いの機会を設けて、勉強しケアに生かしている。				
		c	家族等から拘束や施錠の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	家族から施錠の要望があっても、行わないことを説明し理解を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	○	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、理解を深めるよう努力している。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	権利擁護についてパンフレット等で情報提供し、相談支援を行っている。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関（社会福祉協議会、後見センター、司法書士等）との連携体制を築いている。	◎	支援が必要な利用者に対し、地域包括センターや専門機関と連携し、成年後見制度、任意後見手続きなど必要な援助を行っている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	事故・急変時の対応マニュアルを作成し周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	職員に順番に、応急手当や初期対応の方法の訓練研修に参加を促進している。、				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一歩手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットを記入し、事故の発生を予防している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	1人一人の状態から考えられるリスクにつてケアカンファレンスで検討し事故防止に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルを作成しており、対応は職員を決めて行っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者や家族、地域から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応を行っている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情に対しての対応策を検討してすみやかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝えている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等）	○	日々、利用者の話を傾聴し、職員間で検討を行っている。			○	入居前に、事業所では利用者や家族に、苦情受付体制を説明している。日々のかかわりの中で、職員は利用者から希望や意見を聞くとともに、家族には電話連絡時などを活用して、意見や要望を聞くよう努めている。また、日常業務やミーティング時等を活用して、施設長は職員からの意見を聞くように心がけているが、職員から利用者の個別の意見は多く出されるものの、運営への意見は少ない。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等）	○	入居時に、苦情相談窓口の説明を行っている。各階に意見箱を設置して意見を記入しやすいようにしている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	重要事項説明書の中で、公的な苦情窓口の情報を提供している。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	毎月、法人内の連携会を開催し、労働安全衛生委員会を開催し、職員から直接意見や要望・提案を聞く機会を作っている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	管理社は職員と面談する機会を持ち、利用者本位の支援を行っている。			○	

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	サービス評価を実施して、その意識や目的の理解につとめている。				外部評価の自己評価は、ユニット毎に作成することができている。また、運営推進会議の中で、サービスの評価結果や目標達成計画などを報告し、意見をもらうことができているものの、取組み状況の確認などのモニターの実施までには至っていない。コロナ禍もあるが、利用者家族等アンケート結果からも、サービス評価の取組みに十分な理解が得られていないことを窺うことができる。コロナ禍の収束後には、会議の参加メンバーや家族にモニターを呼びかけたり、日々の目標達成計画などの進捗状況を報告したりしながら、意見や感想をもらったりするなど、事業所として、さらなるサービスの向上を期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	評価を通して課題を明らかにし、職員間の意識の統一や学習に繋げている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	無理のない目標達成計画を定めて取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	運営推進会議にて外部評価の報告を行っているが、各委員から意見をいただくことができるが、モニターまでは行っていただいていない。	×	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議で、取り組みの成果を確認できていない。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルを作成していつでも職員が確認できるようにしている。				事業所では、年2回避難訓練を実施している。現在のコロナ禍において、地域住民等の合同訓練まではできていないものの、道路を挟んで隣接している母体病院と連携し、協力体制を構築している。また、事業所は、市行政から福祉避難所に指定されており、備蓄品などを整備している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	毎年2階訓練を行っている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	定期的に行っている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域住民との共同訓練は行えていない。	○	×	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	避難計画を作成し、福祉避難所の指定を受けている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	介護の勉強会や、講師を招いての啓発活動に取り組んでいる。				法人・事業所として、併設の居宅介護支援事業所や母体病院と連携を密に図り、相談支援体制を構築している。施設長は、近隣の今治市グループホーム連絡会やケアマネ連絡会等でも熱心に活動しているほか、市行政や地域包括支援センター等と連携を密にしている。また、施設長は、「今後は、認知症の家族の集いの場を作りたい」と考えている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	母体の病院や、併設の居宅介護支援事業所と協力しながら相談支援を行っている。		○	◎	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	2020年度より、認知症の人と家族の会のつどいを計画し、年前より趣味活動のお琴の会にも事業所を開放していたが、現在は、新型コロナウイルス感染予防のため、活動を休止している。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	介護ボランティア、介護人材養成名実習受け入れに協力していたが、現在は感染対策のため行えていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	市町や地域包括支援センター、他の事業所と連携を密にして、地域活動を協働しながら行っている。			○	

（別表第1）

サービス評価結果表

サービス評価項目

（評価項目の構成）

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をＰＲ!!!

ーサービス向上への３ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人　愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和　3　年　10　月　25　日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	（回答数）	17名	（依頼数）	18名
地域アンケート回答数	9名			

※事業所記入

事業所番号	3890200029
事業所名	グループホームはとり
（ユニット名）	3Fユニット
記入者（管理者）	
氏　名	管理者　原　文香
自己評価作成日	令和　3　年　4　月　1　日

［事業所理念］	［前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果］	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
楽しく　健やかに　自分らしく暮らす	＃1　個人記録を利用者のその日の行動や感情などが分かるように個人記録用紙を変更した。しかし、十分な記録になっていない。	市内中心部の住宅街に事業所は立地し、母体病院が道を挟んだ場所に隣接している。夜間の往診など、母体病院や協力医と24時間対応の緊急医療体制が構築されており、重度化した場合にも、利用者や家族、職員にとって、心強い環境となっている。また、施設長は、看護師と介護支援専門員の資格を持っており、自ら利用者の体調を確認しながら、利用者本位の生活支援に取り組むとともに、その意識が職員に十分理解され、ゆったりとした生活を提供することができている。さらに、現在のコロナ禍においても、感染対策に細やかで厳格に取り組んでいる。加えて、コロナ禍の収束後には、多くの関係機関と連絡を取り合うことが再開され、地域での存在感が、より増していくことが期待される事業所である。

評　価　結　果　表

項目No.	評価項目	小項目	内　容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	入居時や3ヶ月ごとのケアプラン更新時に希望を聞くように努めている。	◎		◎	事業所ではフェイスシートを活用して、利用者や家族から、思いや意向を丁寧に聞き、把握している。また、要介護度の高いユニットにおいて、思いなどを確認することは大変難しく、職員は利用者の様子を観察しながら、判断して汲み取るよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人にとって良いと思う視点で、検討実施している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	電話連絡、面会等で確認し、職員間で把握している。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	日々の個人カルテに記入するようにしているが、本人の想いや言葉など十分に記入できていない。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	◎	職員同士がコミュニケーションをとり、いちいち一日の利用者さんの言葉や思いを見るようにしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）から聞いている。	◎	入居前後に御家族より聞き取りをしている。利用者本人には入居後慣れたところでお話を聞くようにしている。			○	入居時に、職員は利用者や家族から生活歴などを聞き、把握している。また、母体病院やデイサービスの利用から、事業所への入居につながることもあり、法人とのつきあいも長く、これまでの暮らしぶりを細かく把握できている利用者もいる。さらに、把握した内容は、センター方式を含む独自のアセスメント表を活用して、整理されている。加えて、母体病院等からの情報や、生活歴の情報が少ない利用者には、エコマップを活用したり、知人や関係者から情報を聞いたりするなど、より詳しく利用者のことが把握できるよう、職員間で検討することを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力（わかること・できること・できそうなこと等）等の現状の把握に努めている。	◎	入居後より1ヶ月くらいかけて、現状を把握するようにしている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	ほぼ、把握できており、個人に合わせた対応ができている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。（身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等）	○	不安や不安定要因の把握に努めている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	利用者個人の生活の流れはほぼ把握できている。個々の流れに沿って介護を行うようにしている。				
3	チームで行うアセスメント（※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む）	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	カンファレンスで検討を行っている。現在、ご家族の参加はむつかしいが利用者本人に意思確認を行っている。			◎	事前に把握したアセスメント情報をもとに、利用者や家族の意見を参考にしながら、カンファレンスを活用して話し合いをしている。また、定期的に、一人ひとりに認知症のスケールを実施し、利用者の現状確認とニーズを洗い出している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	△	本人がよりよく暮らすための検討を行っているが、より深く検討することがむつかしい。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	現在、何が課題であるかを明らかにできていると思う。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	利用者本人の想いを少しでも反映できるようにしている。				介護計画の更新前に、事前に利用者や家族の意見を聞くほか、主治医や関係者の意見を取り入れて、カンファレンスで意見やアイデアを募りながら話し合い、計画作成担当者を中心に計画を作成している。現在のコロナ禍において、事業所では面会制限も設けられていることもあり、家族のカンファレンスへの参加は難しく、事前に電話等で意見や意向を聞いている。また、事業所では、利用者や家族の意見や意向を、可能な範囲で反映させた計画づくりに努めている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	御家族や職員には話を聞き、反映できるところは取り入れている。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	重度の利用者に対しても、今まで慣れ親しんだ暮らし方ができるように努力している。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	現在は、新型コロナの影響で、十分な外部との協力体制が取れていない。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	介護計画の内容を、職員が見えるよう温度板に貼り、常に計画を意識して介護ができるよう取り組んでいる。			◎	個別の温度板（ボードタイプの検温表）の左下欄に、介護計画のサービス内容等を転記し、全ての職員は、計画の内容を簡単に確認できるようになっている。また、計画どおりのサービスの実施の有無を、○印で分かりやすく記載している。サービスの実施結果は記載できているものの、実施できなかった場合の理由を記載したり、実施時に日常と違う利用者の様子や発した言葉を記録に残したりするなど、記録の負担軽減とともに職員間で検討することを期待したい。さらに、職員からアイデアや意見は出されているが、個別の記録は少なく感じられる。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	温度板の計画欄に、計画が実行できたかできていないかの欄を作り、印をつけて状況確認をして日々の支援に繋げている。			◎	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子（言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等）や支援した具体的内容を個別に記録している。	△	個別カルテに記入するようにしているが、具体的な言葉、しぐさ、エピソード等の記録が少ない。			△	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	日々の支援の中で工夫しているが、個別の記載が少ない。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	3ヶ月に1回は計画の見直しを行っている。			◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。毎月実施するミーティングの中で、利用者の状態を詳細に確認して評価するとともに、職員間で共有することができている。また、事業所では、入退院のほか、状態に大きな変化が見られた場合には、臨時的に計画を見直す体制を構築している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月評価を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	入退院など、必要に応じて計画を見直している。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	3か月に一度定期的にケアカンファレンスを行い、他必要に応じて開催できるようにしている。			◎	毎月ミーティングを開催するほか、3か月に1回カンファレンスを実施し、職員間で意思統一を図ることができている。緊急案件がある場合には、必要に応じて話し合うことができている。また、会議に参加できない職員には、事前に意見を聞くほか、会議録を確認してもらい、確認後に押印をしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	参加した全員が発言しやすい雰囲気を作っている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	△	勤務時間内で行うため、出勤者のみで行っているが、参加できない職員の意見もあらかじめ聞いておくようにしている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	日誌や、カンファレンス会議などに記入し伝達している。全職員が把握できるようにしている。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	毎朝、申し送りの時間を設け、小さなことは検討できるようにしている。			◎	事業所では、毎朝申し送りを実施するとともに、必要に応じて話し合うことができている。また、ケアの内容以外のことも、業務日誌の申し送り欄を使用して伝達することができる。さらに、出勤時等に、職員は業務日誌を確認し、押印をして確実な申し送りにつなげている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。（利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等）	◎	業務日誌に記入して職員の確認印をとるようにしている。	◎			

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2)日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にした支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	◎	利用者それぞれのその日にしたいことを把握し、希望に添えるように介護している。				事業所では、その日にしたいことなど、利用者一人ひとりの希望や意向を尊重した支援に努めている。見たいテレビ番組や着たい衣類など、日常生活の様々な場面で、職員は利用者に声かけや確認をしながら、自己決定ができるよう支援している。また、施設長は、「利用者への声かけや雰囲気づくりはできているが、現状に満足せずに支援していきたい」と考えている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。（選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等）	○	好きな番組の選択、着たい衣類の選択を行っている。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	利用者個人とお話ができる機会を持ち、本人が自分で決定できたり、納得できるような支援を心掛けている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にした支援を行っている。（起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等）	○	全てに対して実行できているわけではないが、ここの希望に合わせた支援が行えるようにしている。				
		e	利用者の活き活きした言動や表情（喜び・楽しみ・うるおい等）を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	利用者同士の談笑の場や、日常生活上、生き生きした表情づくりができるよう支援している。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	△	利用者の表情や反応を見ながら、コミュニケーションをとるように努力している。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にした言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	認知症があっても、その人らしい生き方ができるよう尊厳を守るように努めている。	◎	◎	◎	申し送り時を活用して、施設長は、人権や尊厳などを話すよう心がけており、職員は理解している。耳の遠い利用者もおり、時には大きな声を出してしまうこともあるものの、職員はさりげない声かけを心がけている。また、職員は、居室をプライベート空間と認識し、入室時には意識した声かけをすることができているものの、まれに利用者に確認せずに、声かけと同時に入室してしまう職員もいる。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	耳の遠い方もおられるため、大きな声になることもあるが、できるだけ、さりげない言葉がけをするように努めている。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮ながら介助を行っている。	○	安心して介護が受けられるように、プライバシーに配慮して介護を行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	居室への出入りは必ず本人の了解を取り、居室での排せつなども、プライバシーに気を付けて介護を行っている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	個人情報の取り扱いに注意して書類の保管を行っている。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	日常の作業を通して、利用者とともに生活リハビリを行い、終了時には感謝の気持ちを伝えて助け合って生活している。				利用者が他の利用者を心配し、利用者同士で声かけや見守りをする場面も見られ、職員はその様子をさりげなく見守っている。また、逆にトラブルが起こりそうな場合には、前もって職員が間に入り、さりげない早期の対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者職員とも仲が良く、声を掛け合いながら生活している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。（仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等）。	○	利用者同士の関係性を職員は理解しており、トラブルが起きないようにさりげなく場面変更などを行い、利用者同士の関係性は職員間で共有している。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	利用者同士でトラブルが生じた時には、職員は静かに見守りつつ傾聴したり、レクリエーションや散歩に行ったり気分転換を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	現在支援をしていただいているご家族は把握しているが、人数的には多くはない。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入居時の利用者・ご家族からの聞き取りと、日頃の会話により把握している。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	通常であれば、買い物支援や家に帰る支援を行っているが、現在は新型コロナの影響で途切れている。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	△	通常であれば気軽に訪れてもらっているが、現在は新型コロナの影響で面会は行えていない。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。（職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない） （※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む）	○	通常であれば、買い物支援や家に帰る支援を行っているが現在は近隣の散歩のみとなっている。	△	○	△	コロナ禍以前は、ドライブをしてコーヒーを飲みに行ったり、近所のコンビニエンスストアに出かけて買い物をしたりするなど、日常的に外出することができていたが、現在のコロナ禍において、外出できる機会は激減している。また、重度の利用者も車いすで、同様に外出できていたが、外気浴程度に留まっている。現在は、感染状況を確認しながら、天気の良い日には、事業所周辺の散歩や外気浴をするなど、少しでも利用者が気分転換できるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	ご家族の協力を得るようにしているが、現在は、新型コロナウイルス感染予防のため実施していない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	外気浴やホーム周囲の散歩など外に出る機会を作っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	△	お墓参りなど、コロナ禍でなければ家族と相談していけるようにしている。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	△	理解するように努力しており症状が緩和できるようにしているが日々業務に追われて余裕が持てないこともある。				職員はさりげなく見守りながら、利用者自身でできることはしてもらう支援に取り組んでいる。また、現在2階ユニットには重度の利用者が多く、施設長は、「できることが少なくなり、自身でしてもらう場面づくりが難しい」などと感じている。さらに、日常的にリハビリ体操を実施するほか、個別にリハビリメニューに取り組んでいる利用者もいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴（筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等）を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	日課として、リハビリ体操や個別の機能訓練などを実施している。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。（場面づくり、環境づくり等）	◎	食器の後片づけや、果物野菜の下ごしらえ、洗濯物たたみなど職員と一緒に行っている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者本人の生活歴や話の中から、得意な物や希望する者を探して把握している。				歌や踊り、習字など、利用者の好きなことに取り組んでもらえるよう支援している。また、併設のデイサービスから、レクリエーションの担当職員に来てもらい、事業所では、行事や日中のレクリエーションの充実を図り、利用者が楽しく過ごせるよう取り組んでいる。さらに、訪問調査日にも、レクリエーションをしながら、利用者の生き生きとした表情を見ることができた。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	習字の先生には献立書、唄の得意な方には歌ってもらう、また踊りの師匠だった方には行事の時に踊っていただくなど、利用者個人の特技を把握して役割や出番を作っている。	○	◎	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	以前は、地区の祭り、など地域の行事に参加していたが、現在は感染対策のためほぼ中止になりできていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	利用者本人の希望に沿って、洋服を選択していただき、その人らしい身だしなみになるよう支援している。				気配りや目配りの中で、職員は整容の乱れを早期に発見し、さりげなく対応することができている。重度の利用者にも、着替え時の前に好みの服を確認するとともに、着替え後には笑顔などの表情で判断しながら、本人らしさが保てる支援に努めている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	◎	本人の個性に合わせて、髪型や毛染めを本人、美容師さんと話しながら決めている。服装に関しても、一緒に買い物に行き好きな洋服を購入することもある。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定がしにくい利用者には、職員がさりげなくアドバイスを行って支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	感染予防のため、現在外出支援はできていないが、行事の時にはその人に合わせた季節感のある服装をしていただくよう支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしてさりげなくカバーしている。（髪、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	○	本人のプライドを大切にしながら近くの職員がさりげなくカバーしている。	◎	◎	◎	
		f	理容･美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	理容・美容は本人の行きつけのお店に行けるように、援助していたが、新型コロナウイルス感染症が収まるまでは、訪問美容を利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	着替えの前に本人の好みを確認して援助している。			◎	
17	食事を楽しむことの できる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	職員は、利用者が食事を日々楽しくおいしく食べられ、健康に過ごせることが大切と理解している。				利用者の希望や旬の食材を取り入れながら献立づくりをするほか、調理の下ごしらえや片づけなど、利用者にできることを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。コロナ禍以前は利用者と一緒にスーパーなどに出かけ、買い物をすることもあったが、現在は事業所で一括して、業者に注文をしている。アレルギーのある利用者には、食材を使用しないよう気を配ったり、代替品を用意したりするなどの対応をしている。利用者の状態に合わせて、刻みやミキサー食などの食事形態の対応もしている。食器類は、利用者の希望があれば、自宅から使い慣れた物を持ってきてもらい、使用している利用者もいる。食事の際には、職員も見守りや声かけをしながら、利用者と同じ物を一緒に食べることができている。また、ユニット毎に、アイランドキッチンを使用して調理していることもあり、重度の利用者も音や匂いを感じることができている。さらに、母体病院の管理栄養士に献立のバランスを確認してもらったり、実際に事業所に来訪し、助言を受けたり、利用者の栄養状態も病院の検査結果で確認することができている。加えて、訪問調査日には、個人記録等から体重が増えている利用者の食事量について、職員等で検討している書面を確認することができた。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともに行っている。	○	買い物は、施設で購入している、以前は近くのスーパーやコンビニに階に行くこともあったが現在は行っていない。献立作り、調理や片付けはできる利用者とともに行っている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	利用者とともに料理の下ごしらえ、下膳やテーブル拭き等を行い、感謝の言葉を言うことで、利用者の自信、達成感につなげている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	職員は、利用者の好みやアレルギーについて、個人記録や毎日の申し送りで把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	季節感がある旬の食材を使用しており、その時に各個人の嗜好やアレルギーを考慮している。			◎	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼･嚥下等の身体機能や便秘･下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等）	○	利用者の身体機能に合わせ、普通食、刻み食、ミキサー食など様々な食事形態を用意している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	利用者個人の使い慣れたものを使用している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	職員も利用者と一緒に同じテーブルで、利用者と会話を、声掛け介助もしながら同じものを食べている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	フロアーでくつろがれる利用者が、調理の音や匂いを感じることができ、食欲をそそる。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	個別に必要な栄養が摂取できるように配慮している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	食事の形態や飲み物の工夫を行い、希望に応じてまた、利用者の体調に応じた水分補給を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	定期的に職員間で話し合い、また病院の管理栄養士にも相談して、アドバイスを受けている。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食器は食器洗浄機にかけ、調理器具は必要に応じてスキッシュなど消毒を利用している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	歯科医師・歯科衛生士の指導を受けて職員は口腔ケアの重要性を把握している。				定期的に、歯科医の訪問があり、全ての利用者の口腔内の状況を確認してもらい、報告書を確認して把握することができている。また、定期的に歯科衛生士にも、歯磨きの指導をしてもらうなど、職員は口腔ケアの重要性を理解している。さらに、毎食後のほか、朝夕にも利用者は歯磨きなどの口腔ケアを行い、職員は見守りをするほか、必要に応じて介助を行っている。加えて、異常が見られた場合には、歯科医の往診などにつなげている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況（虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等）について把握している。	◎	歯科医師の訪問時の報告書により把握している。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科衛生士から個人の歯の状態に合わせたケアの方法の指導を受け支援に生かしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	利用者の認知症の状態に応じて、見守り一部介助・全介助を行い支援している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。（歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等）	○	毎日の食後と朝・夕に必要な介助を行っている。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	口腔内に異常があれば、家族の了解を受け歯科医に往診を依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	トイレで排泄ができるように心がけ、紙パンツやおむつが必要な時には、プライバシーに配慮して介護を行っている。				高齢化や重度化等に伴い、ほとんどの利用者は日中も紙パンツを使用して過ごしているものの、事業所では、安易におむつを使用することなく、可能な範囲で昼夜問わず声かけや誘導をして、利用者がトイレで排泄ができるよう支援している。職員は排泄チェックシートに記録し、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握している。また、要介護5の利用者にも、トイレ誘導を行い、トイレで排泄することができている事例もある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	△	職員は、便秘が体や心に及ぼす影響について理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。（間隔、量、排尿・排便の兆候等）	○	排泄記録を基に利用者個人の排泄パターンを把握し申し送りで伝えている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々の状態にあった支援を行っている。	◎	トイレでの排泄を基本としており、一人一人の状態にあった支援をしている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	看護職員・介護職員で話し合い、改善できる点がないか検討している。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個別のパターンに合わせた声掛け誘導を行い、排泄の失敗を少なくするよう努めている。				
		g	おむつ（紙パンツ・パッドを含む）を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	スタッフ間で検討し本人家族とも相談しながら支援している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ（紙パンツ・パッドを含む）を適時使い分けている。	○	その時の生活場面や本人の状態に合わせている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。（薬に頼らない取り組み）	○	体操や散歩、水分補給や乳酸菌飲料を取り入れて自然排便を促す取り組みを行っている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。（時間帯、長さ、回数、温度等）。	△	希望が確認可能な利用者には希望に合わせているが、リフト浴など重介護の必要な利用者は、機械の空いている時間帯になるため曜日・時間ともほぼ決まっている。	◎		○	利用者は、週3回入浴をすることができる。重度の利用者にも、事前に曜日や時間帯を調整をしながら、併設のデイサービスにあるリフト浴を活用して、湯船に浸かれるよう支援することができている。入浴時にも、洗身など、利用者自身でできることはしてもらい、見守りや待つ介護などの支援にも取り組んでおり、一人ひとりの入浴時間を十分に確保した支援をしている。また、湯の温度や入浴時間など、利用者の希望に応じて、体調面にも考慮しながら、可能な範囲で柔軟に対応することができている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	見守りにて個別に入浴している、かなり長時間入浴される方もおりくつろぎの時間を過ごしている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	利用者本人の状態に応じて、一般浴・リフト浴ができるようになっている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	現在2階は入浴拒否の方はおられないが、拒否の場合には入浴時間、日にちの変更を行って入浴できるよう配慮をしていた。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	バイタル測定や利用者の状態を考慮して必要時に相談している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	毎日の申し送りや介護記録で把握している。				入居前から、眠剤などを服用している利用者には、とりあえず継続して服用してもらっている。夜間に、精神症状が顕著な場合には、体調面を考えて医師に相談しながら、利用者の生活リズムで過ごせるよう支援している。また、事業所では、日中の活動量を増やすなど、夜間に利用者が良眠できるよう努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	申し送りや介護記録を確認して、利用者が領民できるように支援している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	主治医や看護師と相談しながら、日中の活動量を増やしたり総合的に援助を行っている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	食後の休息を、個別に支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人や家族からの要望があれば取り次いでいる。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人の希望時に、こちらからは伝えられなくても電話を替わったり必要な援助を行っている。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	希望時に電話が掛けられるよう、予めご家族と話し合いを行っている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	利用者の希望があれば、返信の援助を行っている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	本人や家族の希望に添えるよう支援を行っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	利用者がお金を使うことが楽しみであることを理解しており、新型コロナウイルスが流行する前には、散歩の途中でコンビニエンスストアで買い物をしたりコーヒーを飲んだりしていた。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	現在、新型コロナウイルス感染予防のため、人ごみへ控えている。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	近隣のコンビニエンスストアやスーパーの協力が得られている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	金銭管理は事務所で行っているが、本人が使うことができるように、自分で払える方は小銭入れを所持して買い物や縁日に出かける。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	家族に同意を得て、本人が小遣いをもって使うことの同意を得ている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。（預り金規程、出納帳の確認等）。	○	令和3年4月より、預かり金を預かり管理、月一回請求書とともに預かり金の収支を家族に送付している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	ご家族と疎遠な方や成年後見、補後見人の方には、家族や後見人と話し合い、日常生活に必要な受診や買い物をスタッフが対応している。	◎		○	認知症の進行など、利用者の意思疎通の低下などに伴い、必要に応じて、事業所では後見人等に確認するほか、成年後見制度につなげる支援をすることもある。また、現在のコロナ禍において、事業所では外出や面会の制限が設けられているものの、利用者や家族の希望や要望に応じて、可能な範囲で柔軟に対応をしている。

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	夜間のみ施錠しており、他は開錠しており、自由に出入りができるようにしている。	◎	◎	○	事業所のある建物の1階にはデイサービスがあり、多くの地域の利用者が来訪している。事業所の玄関は道路に面しており、横には駐輪スペースが設置されている。また、建物の横には道路を挟んで母体病院が隣接しており、地域住民の通院も多く、馴染みの場所になっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。）	○	共用部分は、ソファー、テーブル、テレビなどを備え付け、できる限り家庭的な空間に近づけるようにしている。	◎	◎	◎	共用空間には、ソファやテーブル、テレビなどが置かれ、訪問調査日には、利用者同士が話しをしながら、ゆったりと過ごしている様子を見ることができた。アイランドキッチンがあり、職員はフロアで過ごす利用者の様子を見渡すことができる。また、掃除も行き届き、不快な音や臭いもなく、快適な空間となっている。さらに、玄関先やロビーには、生花や季節感のある飾りを置いている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	職員同士で確認しながら対応している。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節感が出る花などを置いたり、工夫をしながら対応している。			○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	共有部分が各部屋の中央にあるため、常に人の気配を感じることができる。また、一緒にテレビを見たり居室で話をすることもある。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないよう工夫している。	○	トイレは共有部分より少し離れた場所にあり、排せつは分からないようになっている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	使い慣れた鏡台や机を持ってこられている方もいる。	◎		○	居室には、ベッドやタンスなどが設置されている。利用者は使い慣れた家具などを持ち込むことができるほか、写真を飾るなど、利用者一人ひとりに合わせた居室づくりを支援している。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	1人1人の状態に合わせた自立支援ができるようにしている。			◎	職員は、利用者一人ひとりの状態に合わせて、生活を送りやすいよう居室にある家具の配置を変更したり、車いすや歩行器などの福祉用具を選定したりするなどの支援をしている。また、利用者の自立支援を意識して、事業所ではできることはしてもらうように支援している。さらに、利用者が分かりやすいよう、トイレの表示を大きくしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	その時の利用者の認知の状態に応じて、不安や混乱を招くようなものを考えて配置する。また消毒薬などは誤嚥の心配のあるものは必要時のみ用意して事故を防ぐようにしている。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	歌詞カード、新聞等、いつでも利用できるようにさりげなく用意している。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	○	1階の玄関は普通の家の鍵、各フロアの玄関には全く鍵はなく心理的に不安にならないように援助を行っている。	◎	◎	◎	日中、玄関や各ユニットの入り口は施錠をしておらず、夜間のみ防犯目的で施錠をしている。また、職員は勉強会等で学び、職員も鍵をかけることの弊害を理解している。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	利用者の家族とは、入所時に話し合っており、施錠を望むご家族はおられない。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	○	散歩などをして、外出の機会を作り気分転換を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	職員間で情報の共有ができている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	日誌を活用して日々の情報を伝達している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	看護職が常勤でおり日中はいつでも主治医と連絡が取れる。また夜間急な利用者の不具合にも、病院の看護師が対応を行ってくれる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	協力医療機関の往診があり、家族の希望する医療機関受診もできるように援助している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	希望のかかりつけ医の受診支援を行っている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	医療機関受診や通院等ご家族と情報を共有し、必要に応じて話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時に必要な情報を提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	病院入院後も、定期的に訪問又はご家族より状態を聞き、早期退院に向けて協働している。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃より病院関係者との関係づくりを行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	小さなことでも気づきがあれば看護師に伝えるようにしており、必要があれば受信できるように連携している。				
		b	看護職もしく訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	日中は看護職に、夜間は協力医療機関に相談できる体制になっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	小さな変化でも、看護職に報告している。早めの受診や入院につなげるよう努力している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	主に看護職が管理しているが必要時は資料で確認できる。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	薬の変更時は、看護職が確認し、日誌などで伝達して誤訳を防いでいる。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	服薬時に変化があれば早期に看護師に相談し、指導管理の薬剤師に相談したり。、医師に相談することができる。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	心身に変化のある時には、看護師・薬剤師・医師に相談することができる。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入院時や、本人の状態が変化した時には、本人家族に確認して医師に伝達相談して方針を共有している。				事業所には、「重度化した場合における対応及び看取りに関する指針」があり、入居時に利用者や家族に説明して、同意を得ている。事業所の横には、医療連携が取れている母体病院のほか、協力医があり、夜間の往診体制も取れていることや、看護師でもある施設長が勤務していることもあり、利用者や家族、職員は安心感がある。また、重度化した場合には、利用者や家族、関係者を交えて話し合い、方針を共有しているものの、病院や施設への転院を希望する利用者が多く、事業所が開設してから看取り介護の支援をした利用者はほとんどいない。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	重度化・終末期の在り方について、協力医療機関関係者で話し合い方針を共有している。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	現在、看取りの方はいないが、その時の職員でどこまでの見取りができるかの見極めを行い、本人に苦痛を与えない看取りができるかできないかを常に判断している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入所の段階で見取りについては説明を行い理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	医療関係者との連携を図りつつ、職員全体で、利用者が日々よく暮らせるように支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	○	重度の利用者に関しては、今後の経過予測等家族に説明している。また、家族の精神面へのサポートも常に心掛けている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	現在、ノロウイルス感染症対策のため、外部研修への参加は控えているが、母体の医療機関の研修に参加し、また、感染症に対する資料が配布される。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染症予防マニュアルがあり、マニュアルに沿った対応を行っている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所や行政から出る予防や対策について、最新情報を入手し日誌に閉じている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	病院との連携を図り対応を行っている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	玄関や各階の出入り口、事務室などに自動手指消毒器を置き、手洗いを徹底して行っている。利用者や来訪者にも清潔が保てる用にしている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	2ヶ月に一回はとり新聞を送付し、必要時にはご家族日本の近況報告を行っている。				現在のコロナ禍において、事業所では面会方法に制限をかけているため、家族は事業所の行事や活動に参加することはできていない。コロナ禍以前は、お花見会などに参加を呼びかけて食事会を行ったり、家族会を開催したりすることができていた。また、事業所では、2か月に1回写真を多く取り入れた「はとり新聞」を発行して、利用者の事業所内の様子を伝えている。また、事業所には、家族連絡専用のノートがあり、毎月1回は家族と連絡を取ることを心がけている。利用者家族等アンケート結果から、事業所内の出来事や職員の入退職などの情報が十分に伝わっていないことが窺えるため、「はとり新聞」等を活用して掲載したり、コロナ禍の収束後には、来訪時や家族会でお知らせしたりするなど、理解が得られる取組みを期待したい。さらに、家族の面会時や電話連絡時には、職員から積極的に声かけができているため、家族は安心している。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。（来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等）	○	来所しやすい雰囲気にしているが、現在は感染対策のため、ご家族を居室に上がっていただくことはしていない。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。（食事づくり、散歩、外出、行事等）	○	ホームの行事には必ず御家族も参加していただくように招待していたが。現在は新型コロナウイルス感染予防のため、招待していない。	◎		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。（「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等）	◎	2ヶ月に一回はとり新聞を送付し、必要時にはご家族に近況報告を行っている。	○		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	家族への連絡時にさりげなく、ご家族の知りたい情報や不安に感じていることの具体的な内容を把握している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。（認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等）	○	入所時や面会可能な時期には、本人と家族の関係を指示し、できるだけ関係が保てるように努めている。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。（行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等）	○	利用者についての必要な連絡や報告は、行事報告なども含め、定期的に行っている。	×		△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。（家族会、行事、旅行等への働きかけ）	△	現在は、新型コロナウイルス感染症予防のため、交流イベントは行っていない。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にした対応策を話し合っている。	○	入所時の面談時に、入所時のリスクについて説明を行っている。一人一人が楽しく暮らせるように配慮している。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	面会時には声掛けをし、定期的な報告も行っている。家族が知りたいことや不安なことなどを聞きやすい雰囲気を心掛けている。			◎	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	具体的に、説明を行い理解していただけるよう努めている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退去時には、退去理由などの説明を行い、転居先にスムーズに転居することができるよう支援している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。（食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等）	○	文章を提示して説明し同意を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	地域の自治会に理解を得られるように説明している。		◎		法人として、自治会に加入している。現在のコロナ禍において、地域の行事等は激減しているものの、職員は公民館活動にも参加したり、日常的に地域住民に挨拶をしたりすることはできている。コロナ禍以前は、琴などのボランティアを受け入れることができていたが、現在は面会制限もあり、中止している。また、地域住民も参加できる「認知症の家族の集い」などを計画していたが、実現することはできていない。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	◎	地域の方たちとは、日常的に挨拶をして、また地域の自治会への参加、民生委員との連携を行っている。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	近隣住民の方が、声をかけてくれたり、「ここのグループホームがあってよかった」と言ってくださる方が少しずつ増えている。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	現在は、新型コロナ感染予防のためできていないが、職員が外に出ている時などに気軽に立ち話等している。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	現在は感染対策のため立ち寄っていただくことはできないが、近隣の人と気軽に声を掛け合ったり日所的なおつきあいをしている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	×	現在は、感染予防のため、近隣住民のボランティアの支援を受けることができていないが、日常帯に見守りを行ってくれている。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	地域で参加できる、資源が少ないが、地区の広報などで情報は把握するようにしている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	地域の人たちや、近隣のコンビニ、スーパー、交番、神社、お寺などと日頃から理解を深め、良い関係が保てるよう努力している。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	現在、新型コロナウイルス感染対策のため、運営推進会議は書面開催になっている。	×		○	現在のコロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。会議では、利用者の状況や事業所の行事などの活動を報告するとともに、全ての家族に議事録を送付することができている。また、書面開催においても、事前に会議資料にハガキを添えて送付し、参加メンバーから会議の異議の有無や意見などをもらうことができている。さらに、「事業所内の空間を活用して、催しをしてはどうか」などの意見が出され、検討している。コロナ禍の収束後の集合形式の会議開催においても、2か月に1回の会議の連続性や継続性の中で、不参加のメンバーにも、対応の流れが分かるような報告書を送付したり、会議資料の中に、前回の会議情報を記載したりするなど、より充実した会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	外部評価結果を、サービス担当者会議で報告している。			◎	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	△	会議で出された意見や提案を、議事録に記入しサービスの向上につなげている。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	現在は書面開催だが、運営推進会議は、できるだけ多くの人が出席できるよう配慮している。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	運営推進会議議事録を、各階エレベーター前に設置している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	各階に理念を掲げ、日々確認して仕事に取り組んでいる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	利用者、家族、職員、地域の方にも理念をわかりやすく伝えている。	○	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	代表者は、管理者や職員の力量を把握して、計画的に研修に参加できるように援助している。				月１回のミーティング時を活用して、計画的に勉強会や研修を実施するなど、職員のスキルアップに努めている。また、施設長は、日常業務や職員会議を活用して、職員から上手に意見を聞き出すことができている。さらに、法人・事業所として、定期的にストレスチェックを実施するほか、労働安全衛生管理委員会などの場を活用して働きやすい職場環境の改善をテーマに話し合うなど、熱心に取り組んでいることもあり、離職者も少なく、チームワークの向上にもつながっている。
		b	管理者は、OJT（職場での実務を通して行う教育・訓練・学習）を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	OJTを計画的に行い、職員のスキルアップができるよう取り組んでいる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	代表者は、管理者はじめ個々の職員の努力や実績、勤務状況を把握しており、給与水準、労働時間等各自が働きやすいように、環境・条件の整備を行っている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。（事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加）	◎	代表者は、管理者はじめ職員が、愛媛県地域密着型サービス協会・今治市グループホーム交流会、アゼリア会、認知症の人と家族の会へ参加をする機会を作り、その活動を通じて職員の意識を向上させていく取り組みを行っている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	◎	毎月、法人内で医療と介護の連携会を開催し、労働安全衛生管理委員会を開催して職場の環境作りに取り組んでいる。	○	◎	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	毎月、虐待防止の勉強医会を行い職員皆が自覚できるように努めている。				定期的に、虐待防止委員会を開催して話し合うとともに、勉強会を実施し、職員は理解している。また、月１回のミーティング時を活用して、「不適切なケアはないか」などの話し合いをしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	毎月の職員ミーティングで、ケアについて話し合う機会を作っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	職員ミーティングで、虐待や不適切なケアについて話し合いを行い、虐待や不適切なケアが見過ごされないよう注意を払っている。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	ストレスチェックを行い、高ストレスの職員には、産業医を受診しカウンセリングを受けることを進めている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	職員は研修や、ミーテイング後の勉強会などで、「指定基準となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」について正しく理解している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	毎月話し合いの機会を設けて、勉強しケアに生かしている。				
		c	家族等から拘束や施錠の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	家族から施錠の要望があっても、行わないことを説明し理解を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	○	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、理解を深めるよう努力している。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	権利擁護についてパンフレット等で情報提供し、相談支援を行っている。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関（社会福祉協議会、後見センター、司法書士等）との連携体制を築いている。	◎	支援が必要な利用者に対し、地域包括支援センターや専門機関と連携し、成年後見制度、任意後見手続きなど必要な援助を行っている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。		事故・急変時の対応マニュアルを作成し周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	職員に順番に、応急手当や初期対応の方法の訓練研修に参加を促進している。、				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一歩手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットを記入し、事故の発生を予防している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	1人一人の状態から考えられるリスクにつてケアカンファレンスで検討し事故防止に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルを作成しており、対応は職員を決めて行っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者や家族、地域から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応を行っている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情に対しての対応策を検討してすみやかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝えている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等）	○	日々、利用者の話を傾聴し、職員間で検討を行っている。			○	入居前に、事業所では利用者や家族に、苦情受付体制を説明している。日々のかかわりの中で、職員は利用者から希望や意見を聞くとともに、家族には電話連絡時などを活用して、意見や要望を聞くよう努めている。また、日常業務やミーティング時等を活用して、施設長は職員からの意見を聞くように心がけているが、職員から利用者の個別の意見は多く出されるものの、運営への意見は少ない。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等）	○	入居時に、苦情相談窓口の説明を行っている。各階に意見箱を設置して意見を記入しやすいようにしている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	重要事項説明書の中で、公的な苦情窓口の情報を提供している。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	毎月、法人内の連携会を開催し、労働安全衛生委員会を開催し、職員から直接意見や要望・提案を聞く機会を作っている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	管理社は職員と面談する機会を持ち、利用者本位の支援を行っている。			○	

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	サービス評価を実施して、その意識や目的の理解につとめている。				外部評価の自己評価は、ユニット毎に作成することができている。また、運営推進会議の中で、サービスの評価結果や目標達成計画などを報告し、意見をもらうことができているものの、取組み状況の確認などのモニターの実施までには至っていない。コロナ禍もあるが、利用者家族等アンケート結果からも、サービス評価の取組みに十分な理解が得られていないことを窺うことができる。コロナ禍の収束後には、会議の参加メンバーや家族にモニターを呼びかけたり、日々の目標達成計画などの進捗状況を報告したりしながら、意見や感想をもらったりするなど、事業所として、さらなるサービスの向上を期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	評価を通して課題を明らかにし、職員間の意識の統一や学習に繋げている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	無理のない目標達成計画を定めて取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	運営推進会議にて外部評価の報告を行っているが、各委員から意見をいただくことができるが、モニターまでは行っていただいていない。	×	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議で、取り組みの成果を確認できていない。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルを作成していつでも職員が確認できるようにしている。				事業所では、年2回避難訓練を実施している。現在のコロナ禍において、地域住民等の合同訓練まではできていないものの、道路を挟んで隣接している母体病院と連携し、協力体制を構築している。また、事業所は、市行政から福祉避難所に指定されており、備蓄品などを整備している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	毎年2回訓練を行っている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	定期的に行っている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域住民との共同訓練は行えていない。	○	×	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	避難計画を作成し、福祉避難所の指定を受けている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	介護の勉強会や、講師を招いての啓発活動に取り組んでいる。				法人・事業所として、併設の居宅介護支援事業所や母体病院と連携を密に図り、相談支援体制を構築している。施設長は、近隣の今治市グループホーム連絡会やケアマネ連絡会等でも熱心に活動しているほか、市行政や地域包括支援センター等と連携を密にしている。また、施設長は、「今後は、認知症の家族の集いの場を作りたい」と考えている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	母体の病院や、併設の居宅介護支援事業所と協力しながら相談支援を行っている。		○	◎	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	2020年度より、認知症の人と家族の会の集いを計画し、前年より趣味活動のお琴の会にも事業所を開放していたが、現在は、新型コロナウイルス感染予防のため、活動を休止している。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	介護ボランティア、介護人材養成実習受け入れに協力していたが、現在は感染対策のため行えていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	市町や地域包括支援センター、他の事業所と連携を密にして、地域活動を協働しながら行っている。			○	